

私自身としては、予想通りに「来るべきのが来た」との感がある。とはいえず、このところ、中国の政治情勢は、明白な非毛沢東化の方向へと急速に動きはじめている。所せん(色)、政治は二つのはずみでもあるので、この動きは、当面、さうに急いって進むものとも思われるが、中国の場合、こうした政治の流動化が内部の権力的関係を必ず背景にしているだけに、状況はなる流動的といえよう。

一方で、大量の旧軍権派勢力が復活し、文革派幹部の呉徳(党政治局委員)が北京市長を更迭されたあの党北京市委員会などは、毛沢東主席がかつて「針一本、釘一本きせなかつた」実権派の牙城と同様に、すでに再編成されているかのように思われる。半面、「人民日報」や「光明日報」と対照的に、党理論誌「紅旗」が依然沈黙を守って逆流に抗しているような顔があるのも注目に値する。あたかも、文革初期、軍の機関紙「解放軍報」が先行し、やがて「人民日報」が崩れていった状況を想わせるか、はたして、どこまで耐え得るであろうか。

タブー論理の矛盾

こうした動きのなかで、去る十一月十五日付「光明日報」の蘇双碧署名論文は、姚文元批判を超えて毛沢東批判を示唆し、次いで十

九日に北京に張り出された壁新聞は、「四人組」を支持した晩年の毛沢東の限りを初めて名指して指摘した。さらに「民主が独裁を救く」と題された十九日の壁新聞は、毛沢東家長体制を明白に指弾した。「四人組」をあのようにもつとに批判しているが、毛沢東の指導性とその責任に触れることがタブーであるという論理の矛盾が、こうして、拳に切開きようとしているのである。余生を毛沢東批判に賭けることによ

うて、中国民衆のあいだに潜在するある種の「ふききれなき」を解き放し、中国社会の現代化を大胆に推進しようとする 鄧小平の執念はいま、こうして現実の政治過程に反映しはじめたといえよう。

外堀は埋められた

こうした状況のなかで、誰もが注目している存在こそ、華国鋒主席である。中国共産党の政治闘争の一つのパターンが、新しい政治状況に照してリーダーたちの旧歴をあらはくことにあるだけに、文化大革命で浮上し、天安門事件で鄧小平失脚を代償として、その地位を確立した華国鋒の立場は、いよいよ、不確かなものになりつ

試練に立つ華主席

焦点、色濃い毛沢東の影



中嶋 嶺雄

しかも、華国鋒の政治経歴上、明白かつ決定的に重要な事実、彼が一九五五年以来、林彪事件の摘発・調査工作のため中央へ抜擢されるまでのほぼ二十年近い歲月を毛沢東の故郷・湖南省湘潭県の党書記として過ごしてきたことである。党の理論誌「学習」(一九五五年第一期)に発表された華国鋒の処女論文「農村各階級の動態を十分に研究しよう」を読むと、党書記といっても、彼は特務りはすみであるので、ここ当然、公安関係の仕事に従事していたことが歴然とする。そのような華国鋒は、もしかすると毛沢東と血

つながりがあるのではないかと、彼は「四人組」打倒に重要な意味をもたせようとする。最近では、「四人組」打倒のものが鄧小平の傍書である。ともかく、その情報もあるが、ともかく、毛沢東死後、「喪主」もともその側近を一網打尽に打ちとって、またたくまに人民の公敵にして、まどうような凄絶なドラマ

「それは一種の『予防クーデタ』であつた。を演出し得たこの有力な解釈も出てきている。

拘束される「立場」

こうした激動のなかで、毛沢東がこうして来歴は、やはり、彼が毛沢東亡きあとの過渡的なりたどるとはいえ、いかに有利であるものが批判されはじめている今日のような状況においては、彼にきまどう色濃い毛沢東の影とともなるであろう。さらに決定的な問題としては、「四人組」を批判しながら毛沢東を神聖化するこ

政治、やはりはずみも、華国鋒失脚、鄧小平の党主席就任という図式を予測することは、あまりにも筋書通りであつて、そもそも鄧小平自身は政治的ホストに懐疑であるとも思われ、また、この期に及んでは内外に与えるイメージの損失という考慮も働いてあつたから、状況をあまりに短絡して見ることは避けねばなるまい。ただ、政治はやはりはずみであるので、ここ当然、華国鋒のリーダーシップには、内外の注視が集まるであつた。

(東大教授)